1942年7月、咸鏡南道洪原で、ある韓国男性が警察の検問に掛かる。対応の態度が不遜なりとして、事は家宅捜索へと発展する。その男の姪にあたる女子学生(咸興永生女学校2年)の日記まで押収されるが、そこにたまたま「今日国語を使って先生に叱られた」という記述が発見され、これが問題となる。女子学生の授業を担当していた丁泰鎮は身柄を拘束され、拷問の末、彼の属していた朝鮮語学会が「独立運動のための民族主義者の団体」であると虚偽の自白を強要される。こうして朝鮮語学会は日本支配打倒を目的とする秘密結社と見なされ、33人の学会員が逮捕され、16人に実刑判決が言い渡される。拘束中の拷問により2名の死者を出したことから、「朝鮮語学会事件」は、日帝下の警察の残虐さを物語る事件として、韓国の歴史教科書に取り上げられてきた。だが事件の実態となると、不明な箇所が多い。

まず第一に、罪状認知が、明白な事実誤認あるいは、意図的なすり替えの結果だということは、明らかだろう。というのも、授業中に教員が「国語」すなわち日本語の使用を生徒に禁止した、

朝鮮語学会事件再考

上

国原 日本文化研究センター
総合研究大学院大学 研究員・教授

稲賀 繁美

などといった状況は、「国語常用」、「国語浄化」政策のすめられていた40年代初頭の現実としては想定し難いからだ。「国語(クゴ)」すなわちお国言葉＝韓国語／朝鮮語を教室で使ったことを、先生から言い咎められたというのが、問題の「日記」の語る事実だろう。ところがこの「日記」は、公共空間で国語＝日本語が否定された田々しき事態の物的証拠、とまで扱われた、無茶といてよい解釈にすり替えられた。

とすれば第二に、事件の背景として、警察側に相当の予断のあったことが暗示される。そもそもこの女子学生は韓国語／朝鮮語を「国語(クゴ)」と日記に記していた。これだけでも、彼女は日本語を自らの国語と認めない、という反日イデオロギーを立派に体得していたことになる。そうした価値観を学生に植え付けた教師は、当時なら反逆と不従服の「民族主義者」に該当し得よう。

ここまできると、どうやら「日記」の件は、どっちあげとまでは言わぬにせよ、あらかじめできあがっていた陰謀説に好都合な(あるいははなはだ杜撰な)証拠物件を提出する口実に

過ぎなかったらしいことも、臭ってくる。そして実際本事件の判決結果を見る限り、朝鮮語学会の活動を根こそぎ弾圧する意図が、そもそも事件の発端にあった気配が濃厚なのだ。

ではここで問題となった朝鮮語学会とはいかなる性格を宿した学会だったのだろうか。

近代韓国最初の国語学者とされるのは、『大韓国語文法』(1906)、『国語文法』(1910)の著者周時経(1876-1914)。そして「国語」という用法そのものも周が1907年前後に唱えた「国語国文」論に由来するといわれている。そこで周の言う国語とは、もっぱら世宗大王によって制定されたハングル文字によって表記されるべき言語である。中国文明の漢字への依存を払拭しようとするこの態度には、日露戦争後の韓半島の強烈的な国民意識が灯っているといつて差し支えない。そして周の『国語文法』は、1910年の『日韓併合』に伴い『朝鮮語文法』(1911)と改題を余儀なくされた。国語と国民意識とは、このように密接な紐帯をなしていた。

こうした思考連鎖の背景として、金澤庄三郎(1872-1967)、小倉進平(1882-

1944)の存在も無視できない。金澤が文部大臣外山正一およびその秘書官、服部宇之吉(後の京城帝国大学初代総長)の推挙を受けて1896年渡韓したのに対し、小倉は東京帝国大学で上田万年の下に言語学を学んだ。上田は国語こそ国民意識の紐帯と主張したが、これは上田の独創というよりは、当時のドイツ言語学の常識に属す。その弟子にあたる小倉は、1926年に開学した京城帝国大学文学部、朝鮮語学担当教授として赴任した。金澤がいわゆる『日鮮同祖論』(1929)の立役者として記憶されるなら、小倉は1912年から30年にいたる19回の渡朝で朝鮮各地の方言を調査したことで知られる。30年代の日本の国語調査委員会が標準語の確定を目標として方言調査を行ったのとは対照的に、小倉は現実の朝鮮語に関してはさほど関心を示さず、もっぱら朝鮮の方言に保存されている古語古音を探り、朝鮮語の歴史的研究に傾注したとされる。こうした日本帝国わたりの国語学と、韓国の国語学とは、どのような関係にあったのであろうか。

[以下次号]

思

考

の

隅

景

京城帝国大学に朝鮮語担当者として小倉進平が派遣された1926年に先立ち、1921年に発足していた朝鮮語研究会が1931年に名称を変更して再発足したのが、朝鮮語学会だった。これは韓国人のみからなる学術団体であり、その当面の目標には韓国人による韓国人のための「国語(クゴ)辞典」の編纂があげられていた。具体的には、ハングル表記法の統一案の取り纏めと、標準語の査定作業が平行して実施された。人脈からみれば、そこには周時経と直接・間接に師弟関係にあった基督教(改新教)系列の、延禧、培花、梨花などの専門学校教師たちが中心的な役割を果たしていた。その彼らが1942年に弾圧の対象となったわけだ。編纂中の原稿は没収され、戦後刑務所の地下から発見されることとなる。

「朝鮮語学会事件」で最重刑に処せられた3名の略歴を見てみよう。最高刑の懲役6年を求刑された、学会幹事長李克魯(1893-1978)は、1931年の学会創立の中心人物のひとりで、自宅に学会事務局を置いていた。20年代ベルリンで経済学を、ロンドンとパリ大学で音声学を修める。南北統一政府の樹立を訴えた彼は、1948年に金九とともに平壤の南北会談に参加したまま北に残留し、周時経の弟子、金木斗奉と並び北側の代表的国語学者として生涯を終えた。

4年の懲役刑を受けた延禧専門学校教授、崔鉉培(1894-1970)は、1919年に広島高等師範学校の国語・漢文科を卒業のち、京都帝国大学で哲学と教育学を修め、延禧専門学校助教授として赴任するも、38年興業倶楽部(基督教系独立運動団体)事件に連座。周時経の直系の弟子にあたり、漢字で自分の名前が記述できることを苦にした、といわれるほどの、徹底的なハングル専用論者。漢字では表記不能なウリマルこそが、崔にとってのあるべき「国語」の姿だった。戦後ただちに米軍政に編集局長として参加し、「国語」の復権を主導した崔は、朝鮮語学会の後身であるハングル学会の理事に就任し(1949)、ハングル専用運動の中心に位置した。

朝鮮語学会事件再考

「日帝」支配下の民族意識と国語問題・下

梨花女子専門学校教授だった李熙昇(1896-1989)は2年6カ月の刑を受けたが、戦後韓国の国語学の基盤を築いた国語学者として名を残す。1930年に京城帝国大学朝鮮語学及文学科を卒業し、小倉進平の下で朝鮮語学を専攻した最初の韓国人学生だった李は、1940年より42年にかけて東京帝国大学大学院に留学し、言語学を専攻した韓国人の最初のひとりでもあった。戦後は崔とともに米軍政に参加するとともに、「国語」再建に寄与するとともに、京城帝国大学の後身たるソウル大学の国語国文学科を中心に、韓国における国語学の基盤作りに尽くした。ハングル専用主義者の崔鉉培とは異なり、ハングルと漢字併用路線に好意的な立場だった。

1933年には在日中の詩人、金素雲(1908-1981)が全文ハングルによる『諺文朝鮮口伝民謡集』を、新村出、田村杏村らの後援を得て刊行している。ここまで述べてきた韓半島における「国語」意識の伸長のなかに、その業績を置き直してみると、どうだろう。民族の言葉を奪われた経験が国民意識の高揚を招く経緯が、そこには鮮やかに浮かび上がるようにも思われる。だが戦後軍政下で「親日」のレッテルを貼られたこの詩人が、ハングルにおける「国語意識」の芽生えや展開のなかで言及されることは、皆無といてよい。また現在の韓国の若手日本語学者たちの多くは、「朝鮮語学会」や、自分たちの先達の営みに、さして興味を示さないという。翻って韓国人ならだれでも教科書で知っている「朝鮮語学会事件」を知る日本人の数も、けっして多くはないだろう。言語には、民族を暴力的に分断し、あるいは統合へと誘う魔力が宿っている。その振る舞いに無意識に加担する幼稚さは、容易に克服できるだろうか。上田万年の「国語と国家と」(1894)の根底的な批判には、韓国の現実の吟味が欠かせまい。

* 李康民・漢陽大学教授の論文『『国語』の境界』および同教授との議論に触発された。機会を与えられた韓国日本学連合会、第2回国際学術大会(7月8-10日)関係者、とりわけ李漢瑩先生に深謝申し上げる。

国語日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学教授
稲賀繁美